

---

# **[らきすた]かがみとイチャラブ[かがみん]**

龍牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「らきすた」かがみとイチチャラブ「かがみん」

### 【Nコード】

N3855M

### 【作者名】

龍牙

### 【あらすじ】

らきすたの登場人物「柊 かがみ」をメインヒロインとして、かがみに彼氏が出来たらこんな感じじゃね、と言うお話

ひたすらイチチャラブします（予定）

## 馴れ初め（前書き）

初めましてm（――）m

右も左もわからない初心者です

これを読んで、気付いた点、直した方がいいところ、アドバイス、感想、などありましたら教えて下さい

## 馴れ初め

「じゃあちよつと買い物しに行つてくるわね」

そう言つては私は家を出た。

今日は、こなたもみゆきも何か用事があるらしくて一緒に遊びに行けないらしい…

仕方なく勉強していた私は、勉強の息抜きにと、特に誰かと遊ぶ訳でもなく少し買い物に行く事にした。

「ん〜、ほんと今日はいい天気ねえ。」

外に出た私は、雲がところどころに見える程度の青空の下で何気なくそう呟いていた。

「つかさも一緒に来れば良かったのに。」

つかさは何かやる事があるらしくてどうしても今日は行けないらしい。多分宿題でも大量に出されたんだろうけど。

「帰ったら少し手伝つてやるか。」

そんな風に些細な事を考えながら、天気が良かった事もあり、電車で少し遠くまで買い物に行く事にした。

…

……

………

「あー、ついてないなあ。電車に乗る時は空いていたのに…」  
電車に乗った時は少しの人が吊革に捕まって立っているだけだったのに、次の駅で人が大量に流れ込んで来て満員になってしまった。

「これじゃあつかさは来なくて正解だったかも。それにしても早く着かないかなあ」

と扉の近くに押し付けられる様にいた私は、そんなため息をついて

いた。そしたら、

「っ！」

太股を撫でられた気がして息を呑んだ。

『ち、痴漢？ま、まさかそんな事ないわよね…。き、きつとこんな  
に混んでるんだから手が当たっただけよね！』

と自分に言い聞かせていると…

「っ！？」

今度ははつきりとお尻を撫で回してきたのが分かった

『ま、まさか本当に？。ど、どうしたらいいのよ？』

痴漢にあった事がなかった私は突然の事でパニックっしまい、何も  
出来ずにいた。

『ちよっ！！、ほんとどうすればいいのよ！？』

訳が分からなくなってしまうた私は不安と初めてあう痴漢に対する  
怖さで身をこわばらせて涙ぐんでしまっていた。

そんな時に、不意に横から手を引かれて、いつの間にか着いていた  
知らない駅に誰かに手を握られ、そのままホームに降りていた。

いきなりの事で安心していた私は、電車の扉が閉まり出発するの  
を見送って暫くしてから、ようやく冷静になり誰かに助けてもらった  
のだと理解した。

『一体誰が？』と思い振り向こうとする前に

「柊、大丈夫か？なんか何かに耐えてるみたいだったから、もしか  
して痴漢かと思ってここに降りたけど、間違ってないか？もし違か  
つたら悪い…」

それに対して私は

「だ、大丈夫よ。助けてくれてありがとう。」

と言いつつも私は、私の事を「柊」と呼んだこの人が誰だかわから  
ないでいた。

私が不思議そうな顔をしていたせいか、男は

「えっと、もしかして俺の事憶えてない…？」

「え、えっとそんな事ないわよ。えっと、あれでしょ、その…」

「……………」

助けてくれた彼は期待するように私を見ていたが…

「う、……………ごめんなさい」

思い出せない私は、なんとか取り繕うといろいろ言っていたら、助けてくれた彼が期待する様にじつと視られていたら、気まづくなつて謝ってしまつたいた。

「はは……………、やっぱりかあ…。あの頃は違うクラスにばかり行つてたから、どっちのクラスか分からなくなりそうなくらいだったかなあ…」

彼は苦笑しながらそう言つた

「え、つて事は…」

「そう、おなじ高校の二年の時のクラスメイトだよ…」  
と彼は苦笑を漏らしていた…

「そ、そうだったんだ…。ははは…」

「……………」

「う、……………ほんとごめんなさい!」

「はは…、いいいいいよ。一応予想はしていたからね。」

「う、やっぱり他の人から見るとそうなんだ…」

「まあ、ね。んじゃ一応自己紹介しとくよ。二年の時一緒のクラスだった「日比野 龍」だよ。」

『そう言えば聞いた事あるかも…』  
なんて考えていたら、

「ところで柊はこれからどうする? 電車に乗ってたつて事はどつかに用事でもあつた?」

「あ、え、ええと。そうね…。暇だったから買い物でも行こうと思つてただけど…。こんな事もあつたから今日は帰ろうかな」と言つと

「んじゃ家まで送るよ。また何かあつたら大変だしね。」  
なんて事を言い出した。

「べ、別にいいわよ! これ以上あんに迷惑かけられないし…」

「そうか？俺は別に迷惑でもないんだけどな。それに今の時間じゃ結構電車混むけどほんと一人で大丈夫か？」

「え、ほんとに？」

「うん、そうだよ。結構微妙な時間だけど何故だか混むんだよなあ。」

それを聞いた私は『もし、またあんな事されたら』と思うと段々と怖くなってきた。

そしたら彼が

「な、だから送ってやるよ。なんか一人じゃ不安そうだしな」

「なあ　っ、べ、別に不安でもなんでもないわよ。ただあんたに迷惑かけたくないだけで…」

「本当に？」

「ほ、ほんとよ！」

「そう言われても、なあ・・・」

そう彼に言われて、彼の目線を辿ってはつと気付いた。

『そういえばさっきから私ずっと手を繋いだままで……　っ？』

「ほら、やっと気付いた。……まあ別に嫌じゃなかったから言わなかったけど……」

「な、なあっ　っ？」

いきなりそんな事を言われて恥ずかしくて真っ赤になって、繋いだ手を急いで離れた。

「まあ、電車も来たみたいだし、さっさと行こうか。駅は　駅までいいかな？」

まだ顔から赤みのとれてない私をよそに彼は、また私の手を取って丁度来た電車に乗り込んでしまった。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよね！？」

「あれ、駅違ったか？」

「そ、そうじゃなくて……。間違ってはいないけど……。って、あんたはなんで駅分かるの？」

「ああ、そりゃ柊が電車に乗って来るの見たからだけど？俺の使っ

てる駅って、柊が使ってる駅の一つ前の駅だから電車が混む前に見えたっただけだよ。」

「あ、そ、そうだったんだ……」

そう彼は言いながら私の手を引いて、座席が空いてる所がないか見て、席に空きがない事を確認したら、私の使っている駅の出入口となるドアの近くに行き

「まあ、そういう事。……お、出発するみたいだな」

彼がそう言って、ゆっくりと電車は出発した

………



## 電車の中で

.....  
電車に乗り込んでから、いくつかの駅を過ぎた時には、彼の言う通りに電車は、多少スペースはあるが、満員になってしまったいた。

「ほら、言った通りだろ」

「本当だ...」

『確かにこれぐらい混むなら一人じゃ不安だったかも...』  
と思っっていたら

「な、俺が居て良かったろ？」

彼が少し笑みを浮かべながらそう言った

「そ、そんな事ないわよ！な、なに言ってんのよ！」

彼は私の内心を知ってか知らずか、そんな事を言ってくるので私は肯定するのが恥ずかしくて、慌てて否定していた。

「そういえば、昨日さあ.....」

彼は私の気を紛らわそうとしているのか、会話が絶えない様に話しかけてくれていた。

暫く彼とどうでもいい事を話し合っていたら

「おっと、次の駅に着くみたいだな。となると、あと20分位で駅に着くかな。」

「そうね。それぐらいだと思う」

そして電車がプシューと何かの空気が抜ける様な音がして電車が止まった。

「あー、こりやヤバいかも...」

彼がいきなり溜息混じりにつぶやいていた

「？、どうしたのよ？」

私は気になって問いかけると

「まあ落ち着いたら説明するから、ちょっとこっちに」

そう言つて手を引つ張られた

「え、ちょ、ちょっと！」

彼はそう言つと私の手を引つ張つてドアと座席の仕切りの角に私を引つ張り込んで、私が動けない様にドアと仕切りに手を付いて向き合つた。

「な、な、な、なななな！？」

『い、い、一体なんのつもりなの！？私、彼に何かした！？何かおかしな事でも言つたのかしら！？で、でもいきなりこんな事…』

と混乱していろいろ考えていたら、電車のドアが空いて、大勢の人が電車の中に雪崩込んで来て、残っていたスペースもなくなつて、ぎゅうぎゅう詰めの状態になつてしまった。

私を除いては。

『え、ど、どうなつてるの？』

少しするとドアが閉まり電車は出発した。

「まあ、こう言う事だよ。」

苦笑交じりに彼はそう言つた

「え？な、何が…」

あまりこの状況を理解出来ない私はそんな事しか言えなかつた。  
「まあ確かにいきなりだつたからね。つと。んと、理由を話すと、思い返したくもないと思うけどこの電車に乗つてる理由つて、柊にあんな事があつたからだろ。」

「そ、そうね…」

「それで、だ。今は俺も一緒にいるから、あんな事ないと思うけど今の状態…」

そう言つて彼は視線を自分の後ろにやつて見る様に促してから

「こんなんだから、必ずしもとは言えないけど、誰が手がどこかに当たる可能性があると思う。そうなると、さっきの事もあるし、さすがの柊でも勘違いしちゃうだろ。」

「た、確かにそうかも…」

「な、だろ。だからちよつと変な形になつたけど、これならちよつ

とだけど柵の所に余裕できるしな。まあ、なにも言わないでいきなり手引つ張ったりして悪いな。」

「べ、別にいいわよ。……………それに……………たしの……………めに……………してくれ……………だし……………」

『わ、私の事考えて行動してくれたんだ。や、やっぱり「ありがとう」ぐらい言った方がいいのかしら？で、でもやっぱり恥ずかしいし…………』

「？。それに、何？周りうるさくてよく聴こえなかったんだけど？」

「な、何でもないわよ！」

「？。まあそれなら別にいいけど…………」

『い、いきなりき、聞き返さないでよね！お礼言つ、いいタイミングだったのに…………』

そんな私の気持ちを知らない彼はただ頭に「？」を浮かべているだけだった。

その後彼は何か気付いたみたいに、また私に話しかけてきた。

「あ、でも何かあったら直ぐ教えてな。出来る限りなんとかするから。」

「わ、わかったわ。」

「まあ、後１０分ぐらいで着くだろうけどね。」

「そ、そうね。」

残り後１０分程だとわかった私は、気が緩み愚痴を洩らし始めていた。

「はあ、今日是最悪な日だったわあ…………。買い物になんか出掛けないで家にいれば良かったのに…………。つかさの宿題でも手伝ってればあんな目に遭わなかったんだろうなあ…………。」

「まあ、そりゃ仕方ないよ。生きてればそんな風に思う事、何回もあるだろうし。」

彼は律儀にも私の愚痴も聞いてくれていた。

そんな彼を見て、ふと気付いた。

『そういえば、電車に乗っていたって事は、どこかに行く予定があ

つたんじやないのかしら？それなのに、私なんかに付き合わせて……」

そう思うと彼に悪い事をした気がして

「そういえば、あんた電車に乗ってたって事は、何か用事があったんじゃないの？」

「ああ、特に用事とかあった訳じゃないよ。柊と似たようなもんで、暇だったからなんか新しい本とか買いに行こうかなあって思って出掛けただけだから。」

「そうなんだ。でも悪いわね、私なんかに付き合わせちゃったりして。」

「いや、そんな事気にしてないよ。むしろ、柊と話を出来たから出掛けて良かったと思うよ。」

「なあっ　！？」

彼が軽く笑いながらそんな事言うから、私は真っ赤になってうつ向いてしまった。

「ん、どうした。気分でも悪く　　うわっ！？」

「…え？　　ひゃあっ！？」

私は、彼が驚いた様な声を出したから、どうしたのか聞こうと、顔をあげようとしたら思わず高い声を出してしまった。

丁度そこはカーブになっていて、電車が横に動いた為、乗客の一人が私のいる方に倒れ込んでしまったのだ。そう、彼を押す様に…

よって、彼は私のいる方に押し付けられる事になったのだ。

私達のとつていた体勢が体勢なので、はたから見ると丁度密着して抱き合っている状態になってしまったのだ。

勿論私は、異性に抱きつかれた、抱きついた事などなく、あったとして幼少時代に父親相手にしたかもしれない、って程度だったので、状況が状況だが初めての異性からの抱擁に戸惑うしかできなかった。　　「っと、大丈夫か柊？いきなりだったからどっか打ったりしてないか？」

「…　　っ！」

私は息を飲んだ。声をかけられ、はっとして彼の顔を反射的に見たら、彼の顔が目の前にあったからだ。

『ど、ど、どうしてこんな状況になってるのよっ!? あ、あと少し近づいたら、き、キ、キスしちゃうそうなの...』

「柊、柊ってば」

「ひゃ、ひゃい！」

変な事を考えていたせいで、彼から話しかけられた時声が裏返ってしまった。

「ほんと何処も打ってないか？ さっきからうつ向いていたけど...」

「だ、大丈夫だから！ ほ、ほんと大丈夫だから気にしないで！」

「ならいいけど。」

『ほっ.....』

その後すぐに目的の駅に着いたので、彼にお礼と軽い挨拶をして別れた。

## 電車の中で（後書き）

学校の課題が多くなかなか更新できませんでしたorz

感想お待ちしています^^

## 設定

### 時間系列

かがみ達がまだ高校の三年生になったばかり

こなた達は

・たまに出てくる（冷やかしゃ相談にのるときのみ）

・名前しか出てこない（話の中で出てくる程度）

のどちらかにしようと思っています

柊 かがみ

・ツンデレ

・純情

・何気にオタク

・さみしがり屋

- ・突然の事などに弱い

日比野 龍

- ・見た目リア充のオタ
- ・二年の時かがみと同じクラス
- ・運動神経抜群
- ・格闘技の経験あり
- ・学力は普通
- ・中二病気味
- ・身長：176
- ・体重：63
- ・髪形：ワイルド

こんな感じで考えてます



## 設定（後書き）

ようやくテスト期間から抜けだし、書こうかと思ったんですが、なかなかインスピレーションがわなくて書けません・・・

なので暫くこの話はお休みして違うのを書きたいと思いますm（

ー）m

読んでくれている皆様すいません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3855m/>

---

[らきすた]かがみとイチャラブ[かがみん]

2010年10月9日13時20分発行